人権啓発コーナー

人権が尊重され、生きがいが感じられるあたたかい町

人権問題の重要な課題は、「差別」がなくなることだと思います。県内の中学生が書いた人権作文を読み「このような考え方が差別の解消につながるのでは」という作品に出会いましたので紹介します。

外国籍を持ったお母さんが差別に合い、周囲への理解と人権の大切さを真剣に訴え、多様性と認める共生の心を育み、自己実現の生活を送られたという内容です。

お母さんは、就職するための面接を幾度となく断られましたが、1社だけ受け入れた企業がありました。それは、国籍やコミュニケーションが取れないことで判断をしたのではなく、お母さん本人の真剣さと人間性を見て採用したということです。

さらに、作品を書いた生徒さんの仲間たちが、国籍や出身を気にせず、お母さんと仲良く触れ合ったそうです。そんな様子をみた生徒さんは「差別をなくす一番の方法は、互いを良く知ること」、さらに「互いを知るには、コミュニケーションが大切だ」ということに気付きました。

このような状況が広がっていけば、差別はいつかはなくなっていく気がすると思いました。住民の皆さんの誰もが幸福で大切な人権を守り、差別のない町づくりを推進しましょう。

人権学習 web 講座

テーマ「災害と人権」
日時　7月11日（火）13時30分～
場所　氷川町文化センター講堂

問　生涯学習課
☎0965-52-5860

八火図書館だより

梅雨明けも間近、これから本格的な夏の到来です。図書館では子どもたち向けの夏休みにおすすめの本をはじめ、大人も楽しめるいろいろな本を準備して、皆さんをお待ちしています。

新着図書紹介

一般書

すきだらけのビストロ　冬森　灯
オール・ノット　柚木　麻子
逆転のバラッド　宇佐美　まこと
脳の闇　中野　信子

児童書

すしん　たなか　ひかる
死神です　有田　奈央
色とりどりのぼくのつめ　アリシア・アコスタ
さくらももこのことばと人　さくらプロダクション

おすすめ図書

くもをさがす　西　加奈子

「自分の体を取り戻した」著者の約8カ月間の乳がん治療体験記。涙あり、笑いもあり、著者からのメッセージがいっぱい詰まった、誰もが心を揺さぶられる傑作。

7月生まれの作家

曲亭（きょくてい）馬琴（ばきん）
（1767年7月4日～1848年12月1日）

曲亭馬琴は江戸時代後期を代表する戯作者です。代表作は「椿説弓張月」、「南総里見八犬伝」などです。「南総里見八犬伝」は、執筆途中に失明という困難に遭遇しながらも、28年もの歳月を費やして完成させました。

問　八火図書館
☎0965-62-3489

地域おこし協力隊　活動レポート㉛

5/13　氷川町産食材でオリジナルカレー

熊本市のびぷれす広場で「つなぐ・つながる・フェアトレードシティ2023」が開催され、氷川町産の晩白柚、トマト、玉ねぎを使い、オリジナルカレーを作りました。容器は、プラスチックごみ削減のため、餃子の皮で食べられるカップにしました。

5/20　料理教室を開催しました！

今回のメニューは、鶏ひき肉入り豆腐、ポテトサラダ、生ハムバラカナッペ、ところてん。ところてんは天草産のてんぐさから、ポン酢は晩白柚から作り、ワカメと晩白柚のむき身をのせました。初めてところてん突きを使う人が多く、楽しんでもらえました。

インスタグラム▶

料理教室のお知らせ
「 暑さ吹っ飛ぶスタミナ料理 」

日　時　7月22日㊏　①10時～ ②13時30分～
場　所　氷川町公民館　調理室
参加費　500円
持参物　エプロン・三角巾・タオル・保冷バッグ・水筒
申　込　地域おこし協力隊 蜂須（農業振興課内）
☎0965-52-5854
締　切　7月14日㊎

町民文芸

短歌

盆正月赤い布など織り交ぜて
草履造りし祖母でありしよ
西上宮　村内　一誠

インドより尋ね尋ねて風来たる
朱夏の匂ひをにじませつつも
北野津　井田　道寛

老人会浦島太郎の主役びと
白寿祝いの涙の言葉
西野津　古崎　スエノ

朝日差す代田にひしひし増す水の
夏空浮ふ水面なり
西野津　古崎　栄子

俳句

もみじばの暗褐色（あんかつしょく）にのびのびと
西上宮　村内　一誠

みどり濃き氷川の藻のゆれ夏の底
北野津　井田　道寛

子や孫と祝う米寿の若葉かな
西野津　古崎　スエノ

そよぐ髪園児のひ孫バラの花
西野津　古崎　栄子

投稿先
〒869-4814
氷川町島地642番地
企画財政課宛（毎月5日必着）

「雪国」VS「山の音」

法道寺　本田　花風

島村と信吾、駒子と菊子二組の男女が織りなす物語ではあるが、その現実化された「山の音」の信吾は今でいえば人生の折り返しをちょっとばかり過ぎた年齢、であれば彼が美しい女に関心を持つことには何の抵抗もないところだ。菊子にしても優しく接してくれる信吾に単なる嫁の立場以上の男性への心情が生まれてもおかしいものではない。一方、島村と駒子の関係も旅先で出会った二人の関係もあり得ることであるが、この二つの物語で川端が語った物語には、彼の人生を投影して作品化しているのだろう。文学作品で男女を描かない作品もあるにはあるが、川端の作品にはすべて男と女が状況を変えて登場する。

「雪国」も「山の音」も主人公、島村と信吾、男二人が、即ち作者「川端」の人間性がすべてを語っているよう、物語も二人をとりまく人々の中に重要な立場の女があった。それを主人公の目線で人々を描く、これは川端の精神性に大きく繋がっているのだろう。比較は不要で会った。そのことは、彼の人生の裏側を描いた『日本文学文壇史』にその一面がよく書かれている。